

『神さまの愛』 ヨハネ3:16

3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

○序論

今日の聖書の御言葉は、聖書の中心、ミニバイブルと呼ばれるところです。

聖書にはもう一箇所、だれもが知る短い聖句があります。

「神は愛である。」

そしてその前にはこうあります。

1ヨハネ4:16 わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。…

これまで、わたしたちはニコデモに対して語られたイエスさまの言葉から、まず『一番知ってほしいこと』と題して「神さまの霊によって新しく生まれなければならない・新生」について聞きました。

更に先週には、『「信じることへの招き」』と題して、「キリストを信じることで、神さまとの新しい関係に入る」ことを見てきました。

その2回のお話の背景にあったのも、神さまの愛でした。

だから言われているのです。

「わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。」

今日、『神さまの愛』と題して聞くのは、もっともシンプルではっきりとした神さまからの「あなたを愛しているよ」という真実なメッセージです。そしてこれが結論です。

○本論

I. 神さまは「世」を愛された

神様の最高の御心…。それは、「世を愛した」ということです。

「3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

この「世」に対する神様の関心を無視できません。

しばしば、この「世」という言葉を「私」に置き換えて読みなさい、と指導され、そして「ああ、私を愛している」ことを示しているんだなと思うようになります。

それはその通りです。

しかし、今日は、この御言葉をそのまま、「神は世を愛された」と聞きます。

それは、当時のローマ帝国の支配や悩み満ちた世界を愛した。いやそればかりか、今、わたしたちの住んでいるこの時代、環境、この社会のすべてに、神さまは大きな関心を持ち、いや明確に「愛している」と表現しているのです。

ところで、この当時の宗教の指導者たちは、世と世にあるものから離れることを大切な

こととし、「世にある汚れ」、「世にある病気」、「世にある悩み」、「世にある痛み」にふれることを拒み、避けて通る歩みをしていました。

しかし、神のひとり子イエスさまは、人となってこの地に来られ、病の人に触れ、罪びとと一緒に食事を誌、貧しい人たちやこどもたちと過ごされました。

イエスさまの言葉はこうでしたね。

マルコ2:17 「…わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

神さまは、この世を愛してキリストを遣わされました。

だから「この世を愛された」という言葉をそのまま受けとめることは大切です。

Ⅱ. 信じる人を滅びから救い命を与えるため

…独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

「罪と滅び」は抱き合わせです。

滅びとは、死後の裁きによってもたらされる、神の裁きです。そこで宣告されるのは、永遠の死、永遠の滅びです。

しかし、そうならないようにそうなってほしくないために、キリストは来てくださいました。そのすべてを、ご自身が負われるためです。わたしたちの身代わりとして背負われ、十字架で苦しまれ死なれたのです。

想像できますか？全世界の、全歴史の人々のすべての罪を背負われてその報いを味わわれた、無垢な神の子キリストの苦しみがどれほどのものであるか。まさにそれはわたしたちの想像をはるかに超えます。

だから、わたしたちは、「独り子（イエス・キリスト）を信じる者が一人も滅びない…」

英語では、「whoever believes in Him should not perish」（彼を信じる者は、だれであっても滅びない）とあります。

たとえどんな人であっても、キリストを信じるならば、滅びから救われる。…それが聖書が語る福音です。

先週、神とモーセに逆らった民が、毒蛇によって次々と死んでいく中、神に指示された方法が、青銅の蛇をつくって竿の先につるし、それを見るものは、癒されるという出来事をみました。

そこで、「そんなものを見上げて何になるんや!？」と、見上げなかったものは滅び、それを信じて見上げた者は、たとえ死の間際にあっても癒されたのです。

それは、青銅のへびそのものに力があつたのでは決してありません。

そうではなく、ただ神の言葉を信じて、その通りにした時、そこに癒しがあつたので

す。

イエスさまは、それを「人の子もまたあげられなければならない」とご自分がかけられる十字架のありさまに重ねていました。

十字架、それは当時のもっとも極悪人がかけられる極刑中の極刑であり、恥と呪いの象徴として、人々がだれもが知る、最も愚かな者がかけられる処刑でした。人へのチャレンジは、あの青銅の蛇のように、信じてこの十字架を見上げることです。

パウロはこう語ります。

1コリント1:18 十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。

:18(LB) 「イエス様は私たちが救うために死んでくださった」ということばが、滅びゆく人々にはどんなに愚かに響くか、私にはよくわかっています。しかし、救われた私たちは、これが神の力そのものであると認めるのです。

当時のだれもが、イエスの処刑を見て、彼は何て愚かだ!というのが感想でした。それが十字架の意味するところでは。

しかし、この方によってこそ、私たちは、救われて神さまとの新しい関係の中に入れていただけるのです。

先ほどの続くところでパウロはこう語りました。

1コリント 1:23-24 (LB) それで、人々を救うために死なれたキリストについて話すと、ユダヤ人は腹を立て、外国人は「まるで無意味だ」と言うのです。しかし神は、ユダヤ人でも外国人でも、救いへと招かれた人々の目を開いて、キリストこそ彼らを救う偉大な神の力であることを悟らせてくださいました。実に、キリストご自身こそ、人々を救うための、神の知恵に満ちたご計画の中心なのです。

神様には目的がありました。それはわたしたちを滅びから救うためであった。

Ⅲ. 神さまの愛を受け取る

3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

「あなたを愛しているよ」と、聞き取ること、受け取ること。それが今日の結論だと最初にお話ししました。

わたしたちが、だれかを愛するとき、また愛される時、そこで交わされる会話のカギは、お互いの関係性次第ということができます。

お互いに好意を持っていれば、「好きです」「愛しています」という言葉は、まっすぐ相手の心に響き、「うれしい、わたしもです」となるでしょう。

しかし、そうでない場合には、その言葉は届かないし、響きません。記憶にも残ら

ない…。じつは、それがかつてのわたしの姿でした。

「そのひとり子をくださるほどに」とは、ある意味神のひとり子イエス・キリストをラブレターとした神の愛のメッセージです。

しかし、先ほどもお話したように、かつてのわたしの心は閉ざされていて、聞いてはいても響いておらず、その聞いたことさえ記憶にはありませんでした。

鈍いわたしの心を開いたのは、失恋と挫折、手にしていたはずのものをすべてはぎとられるような経験でした。何もかも失ったかのように思えた時に、かすかに聞こえてきたのは、「わたしがあなたを愛している」という言葉です。

わたしはそこから貪るように聖書を読み、神さまを求めました。キリストを知りました。十字架を知りました。そして救いを知りました。

そんなわたしは、友達のアパートで、しかも皆がお酒を飲んで荒れ果てていた現場で、自分の救いを証しすることで、涙があふれ、その証を通して自分は救われているという実感を得ることができました。

「あなたを愛しているよ」という神さまの御声。聞こえなかった者が、聞こえるようになった瞬間。わたしがいたのはまさに「この世」でした。

その瞬間まで、荒れ果てていたそのアパートの一室、友人たちも共に泣き、そしてそのあと、その彼らを教会に導くきっかけとしてくださったのです。

神は、この世を愛してくださいました。それは現実の悩みや問題やどん底、さらに言えば、苛烈な戦地をも含むでしょう。

そこはキリストから遠い場所でしょうか？　そこでキリストは人を救いえないでしょうか？　わたしははっきりと「いいえ」と言います。

そこでこそ、その現実の中で打ちひしがれ、悲しみ、震え、恐れている人が、「主よ助けてください」と心を開くとき、そこにキリストとの出会いがあります。キリストの愛に心が震えるのです。

先日紹介した、ジョン・ニュートンは、奴隷商人の罪のどん底、そして嵐の絶体絶命の状況下で、神さまを求めて出会いました。あの兼光先生は、あの都島拘置所の中で神さまと出会いました。神さまは、この世のどん底を知っててくださいます。そして愛している。なぜならそこにいる人たちの声を聞いて、救い出すためです。

神さまは、イエス・キリストを通して、わたしたちにとってもシンプルではっきりと「わたしはあなたを愛している」と語ってくださっていることを知ってほしい、そして心を開いて、その場所で、自分のものとして受け取ってほしいのです。